

体験と言語を一体化した指導で 国際的に通用する力を付ける

帝京大文学部教授／帝京大小学校校長 星野昌治よしはる

求められる学力は、社会の変化と共に変わっていく。今後、日本の子どもが国際社会を生き抜く上で求められる学力とはどのようなものか。帝京大の星野昌治教授に整理していただいた。

今後、必要な学力とは

知識、思考力、学習意欲等を含む 総合的な力

国際的な競争にさらされる時代となり、学力に対する考え方が変わってきました。かつては、詰め込み教育などへの批判から、ややもすると学力について語ることはばかられる雰囲気がありました。今は、日本人が国際社会で生きていくために学力について考えることが不可欠という認識が広まっています。

それでは、国際的に通用する学力とは、どのようなものでしょうか。これはまさに、学校教育法第30条2項(図)で定義された三つ

の要素、すなわち基礎的な知識・技能、それらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力、そして主体的な学習態度と考えてよいと思います。このように、法律で「学力」を定義したことの意義は、とても大きいのではないのでしょうか。日本の子どもはこうした学力を付けて世界に立ち向かっていくという、国の考えの表れだからです。

この三つの要素のうち、どれが欠けても学力が高いとはいえません。基礎的な知識が不足していれば幅広く考えられず、考えても分からなければ学ぶ意欲は下がってしまいます。つまり、三つの要素は別個に存在するのではなく、相互に関連しているのです。

ここでいう学力には、知・徳・体の「知」

だけではなく、「徳」「体」も含まれています。知・徳・体もそれぞれが関係し合いますから、総合的に考えるべきです。例えば「早寝・早起き・朝ごはん」が習慣化している子どもは、身体が健康になって体力が付きます。更に、生活習慣が整い、健やかな気持ちで毎日を過ごせますから、学習意欲も高まり、深く考えられるようになります。

日本では、子どもが校内の掃除をしたり、部活動をしたりと、伝統的に「徳」「体」を含めた総合的な教育を重視してきました。心を磨くこと、体を鍛えることが、学力を高める上でも重要だと考えてきたのです。この方針は、まさに日本が世界に誇れる部分ではないでしょうか。

考える力を育むために

「考えるもと」となる 体験活動・言語活動を充実

ここで「知」に目を向けると、これからは「考える力」を育む教育がより求められます。問

図 学校教育法 第30条2項(抜粋)

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

現在と未来をつなぐ小学校教育

題解決能力の育成に大きな役割を果たす理科が、「全国学力・学習状況調査」の対象教科に2012年から追加予定であることにも、それが表れています。

考える力を育むには、一定の知識・技能が欠かせません。しかし、その知識・技能が教え込まれたり断片的に与えられたりしたものであつては、それを基に考えることが出来ません。考えるためには、子ども自らが体験したり、それを言葉に残したり人に伝えたりといった活動、すなわち一連の体験活動と言語活動を経て、知識や技能が自分のものになっている必要があります。これらの活動が「考えるもと（土台）」となるのです。

例えば理科であれば、実験や観察をして、結果を振り返り、記録や説明をする学習を通して



ほしの・よしはる ◎東京都立教育研究所教育部長、東京都公立小学校校長などを経て現職。専門は初等理科教育、学校経営論。文部科学省小学校学習指導要領解説理科編作成協力者などを務める。編著書に『新しい小学校理科・授業づくりと教材研究』（東洋館出版社）など。

して、子どもは考えたり表現したり出来るようになります。机上の知識だけで頭の中をいっぱいにせず、体験活動と言語活動を一体化した活動を通して考える力や姿勢を身に付けていけるような、思考や気持ちに余裕のある、「伸びしろ」のある子どもを育てることが大切ではないでしょうか。

体験と言語の関係と同様に、思考、判断、表現も一体のものとして捉えられます。考えられるから判断が出来、判断が出来るから表現が出来ます。そして、表現することがまた、考えることにつながるのです。学校ではこれをばらばらに、一つずつ意味付けしがちですが、一体化して考えることが重要です。

学校段階別の役割を考えると、小学校は知識・技能の基盤を固めると共に、考え方や学び方を身に付けるべき段階です。小学校で考える土台づくりをしておくことで、生涯にわたり伸び続けられる子どもになるでしょう。

校長先生への期待

目指す子ども像を明確にして 校長主導でカリキュラム作成を

小学校の教師の大切な役割は、個々の子どもに応じた手立てを講じ、一人ひとりの才能を開花させる指導と支援をすることです。指導が苦手な教科もあるかもしれませんが、子

どもはその教科を楽しみにしています。例えば、理科の指導が苦手でも、子どもと一緒に実験し、失敗したら原因を突き止め、成功したら皆で喜ばばよいのです。

私は、ピアノが得意ではありませんでした。学級担任をしていた時は1本指で弾くこともありましたが、「10本指で弾く先生もいるけど、先生は1本指で弾けるんだぞ！」などと逆手に取って楽しく指導していったものです。

子どもの力は無限で、どの方向にも伸びていく可能性を秘めています。だからこそ、校長先生は、どのような子どもを育てたいかをよく考え、そのためのカリキュラムをつくり、先生方と共に具現化していく必要があります。教育課程の作成・管理において校長先生がリーダーシップを発揮することが今後は更に重要になるでしょう。

ポイント

- 学校教育法で定義された学力の三つの要素のように、知・徳・体に表される力を総合的に育てる必要がある
- 「考える力」の育成が特に重要。体験活動・言語活動を一体として捉え、充実させることが「考えるもと」となる
- 教育課程の作成・管理において、校長先生のリーダーシップがますます求められる

*プロフィールは取材時(2011年3月)のものです